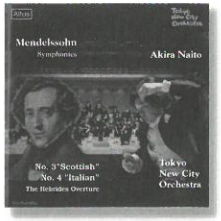
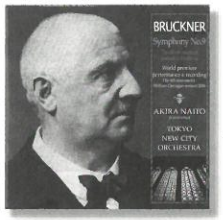
レコーディング作品

ブルックナー 交響曲第５番
Anton Bruckner / Symphony No.5 in B-flat major
オリジナル・コンセプツ（川崎高伸校訂）　世界初演＆世界初録音
2,625 円（税込み）
Delta DCCA-0060
発売日 2009 年 5 月 30 日

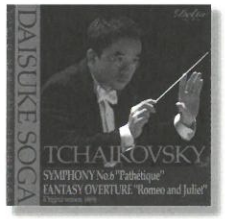


メンデルスゾーン 交響曲第３番「スコットランド」・第４番「イタリア」・フィンガルの洞窟
Felix Mendelssohn Bartholdy / Symphony No.3 in A minor "Scottish", No.4 in A major "Italian", The Hebrides Overture
ノンヴィブラート奏法でメンデルスゾーンの当時の響きが甦る！
2,825 円（税込み）
Altus ALT163
発売日 2008 年 12 月 20 日

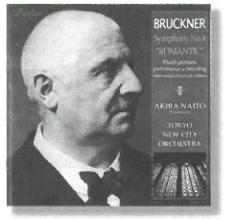
カリンニコフ 交響曲第１番・第２番
Vasily Sergeyevich Kalinnikov / Symphony No.1 in G minor, No.2 in A major
知る人ぞ知るロシアのメロディメーカーを曽我大介が熱演
2,625 円（税込み）
Delta DCCA-0042
発売日 2007 年 11 月 21 日



ブルックナー 交響曲第９番
Anton Bruckner / Symphony No.9 in D minor
第４楽章　キャラガン版 1983 年 /2006 年 9 月補完　の世界初演＆世界初録音
2,625 円（税込み）
Delta DCCA-0032
発売日 2007 年 2 月 28 日



チャイコフスキー交響曲第６番「悲愴」幻想序曲「ロミオとジュリエット」
Tchaikovsky / Symphony No.6 In B Minor "Pathetique" - FANTASY OVERTURE "Romano and Juliet" (Original Version, 1869)
国内初録音の「ロミオとジュリエット」（１８６９年）を含むドラマティックな曽我のチャイコフスキー
2,625 円（税込み）
Delta DCCA-0024
発売日 2006 年 6 月 29 日



ブルックナー交響曲第４番
Anton Bruckner / Symphony No.4 in E-flat major "Romantic"
国際ブルックナー協会発行第３稿コースヴェット版の世界初演・世界初録音
2,625 円（税込み）
Delta DCCA-0017
発売日 2005 年 10 月 15 日

お申込み：東京ニューシティ管弦楽団事務局　tel：03-5933-3266　fax：03-6766-3782

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団
第80回定期演奏会

2012年2月3日（金）19:00開演

東京オペラシティコンサートホール
Tokyo Opera City Concert Hall Takemitsu Memorial

主催：東京ニューシティ管弦楽団

Members

音楽監督・常任指揮者	内藤 彰	コンサートマスター	鈴木 順子
首席客演指揮者	曽我 大介	コンサートマスター	執行 恒宏
客演指揮者	アンドレイ・アニハーノフ	客員コンサートマスター	浜野 考史

本日の出演者

●第1ヴァイオリン
○鈴木 順子
剣持 由紀子
小澤 郁子
中澤 真理子
山川 奈緒子
中 一乃
河合 晃太
小泉 百合香
寺田 久美子
吉岡 篤志
田口 雅人
林 千夏
大澤 美佳
山本 大将

●第2ヴァイオリン
○中島 ゆみ子
高階 久美子
荒巻 泉
伊東 佑樹
秀川 みずえ
塩野入 清美
平山 慎一郎
大塚 杏奈
福井 啓太
海保 あけみ
岩澤 幸子
永野 亜季

●ヴィオラ
○中山 良夫
久郷 寿実子
浅川 文
鈴木 友紀子
宇佐美 久恵
三谷 陽子
古田 敦子
三品 芽生
沼田 由恵
島岡 万理子

●チェロ
○三宅 進
星野 敦
船田 裕子
松本 ゆり子
望月 直哉
海老澤 洋三
若狭 直人
横溝 宏幸
平山 正三
棟元 名美

●コントラバス
○佐々木 等
青山 幸成
岡田 友希
照井 岳也
金子 敦子
小澤 剛
松江 佐知子
浅田 真亮

●フルート
○立住 若菜
福田 将史
原田 佳菜子
谷藤 万喜子

●オーボエ
○徳田 振作
小山 祐生
川城 恵

●クラリネット
○西尾 郁子
松元 香
粟生田 直樹

●ファゴット
○藤田 旬
松里 俊明
森田 一途美

●ホルン
○上間 善之
藤田 麻理絵
○猪俣 和也
古江 仁美
小川 敦
飯島 さゆり
溝根 伸吾

●トランペット
○中西 清一
後藤 慎介
○依田 泰幸
鎌田 朋幸
柴田 紘子

●トロンボーン
○渡辺 善行
松谷 聡美
恵藤 康充

●チューバ
稲増 優乙

●ティンパニ＆パーカッション
○渡辺 壮
大河原 渉
清水 由喜男
綱川 淳美
目等 貴士

●ハープ
平山 菜津子

○印は本日の首席奏者

パーソナルマネージャー
山川 奈緒子
ステージマネージャー
土屋 秀仁
ライブラリアン
天笠 夏希
石本 順子

〔事務局〕

事務局長　高松 正典
営業・企画　上原 久幸　森田 祐世
事務局スタッフ　森本 芙紗慧　福島 貴子　相吉澤 絵里　山本 ふさこ
チケットデスク　武曽 眞紀子　木村 有美子　坪井 一広

イメージコーディネーター　古山 忠男　嵯峨 亮子

Program

The 80th Subscription Concert

第80回定期演奏会

指揮：**内藤 彰** Conductor : Akira Naito

コンサートマスター：**鈴木 順子** Concert Master : Junko Suzuki

指揮者によるプレトーク

山田 一雄 Kazuo Yamada (1912-1991)

おほむたから 作品20
Ohomutakara op.20

楽譜協力：オーケストラ・ニッポニカ

休憩15分　intermission [15min.]

マーラー Gustav Mahler (1860-1911)

交響曲第5番 嬰ハ短調〈新校訂版〉(2002年C.F.PETERS社)
Symphony No.5 in C sharp minor〈Critical Edition〉(C.F.PETERS 2002)

第Ⅰ部

第1楽章 葬送行進曲：悠然とした歩みで、厳格に、葬列のように
In gemessenem Schritt. Streng. Wie ein Kondukt.

第2楽章 嵐のように荒々しく、この上なく激しく
Stürmisch bewegt. Mit grösster Vehemenz.

第Ⅱ部

第3楽章 スケルツォ：力強く、速すぎずに
Kräftig, nicht zu schnell.

第Ⅲ部

第4楽章 アダージェット：きわめてゆっくりと
Adagietto. Sehr langsam.

第5楽章 ロンド・フィナーレ：アレグロ
Rondo-Finale. Allegro giocoso

お願い　演奏中は、携帯電話・アラーム付時計等は演奏の妨げにならないようご配慮ください。他のお客様のご迷惑になる様なご行為は慎んでいただきますようお願い申し上げます。

文化芸術振興費補助金
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

内藤 彰（指揮）

名古屋大学理学部在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科（指揮専攻）にて、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明各氏他に師事し、修了後（社）山形交響楽団の専属指揮者を務めた後、日本の多くの主要オーケストラを指揮してきた。

海外では、1991年ベオグラードフィル、1992年にはモスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』、また2001年3月にはサンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演している。その他にも2001年12月の北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアー、2003年3月メキシコ州立交響楽団、2010年4月にはメキシコ国立交響楽団の定期演奏会を指揮している。また2011年5月にブルガリア国立プロヴディフィルに客演した。

Akira Naito

●Conductor

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』公演（東京ニューシティ管弦楽団第34回定期演奏会）にて、日本の伝統的'かね類'（寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他）に、12音の音程を持たせ'楽器'として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題をさらうことになった。更に2004年7月には、イタリアのプッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新聞・テレビに大きく取り上げられている。

2004年以来ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章をはじめ、交響曲第5番、第9番など新稿の世界初演を果たした。この「ブルックナー新稿の世界初演シリーズ」の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わすのみならず、ライブ録音のCDは、「レコード芸術」誌などで高く評価されている。また、日本初のブライトコプフ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスも大いに注目を集めている。

2009年1月に初めての著書「クラシック音楽 未来のための演奏論～くつがえるオーケストラ演奏の常識!～」を毎日新聞社より出版し、斯界に大きな反響を呼びおこし話題にのぼったことは記憶に新しい。

現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者、日本指揮者協会幹事。

東京ニューシティ管弦楽団

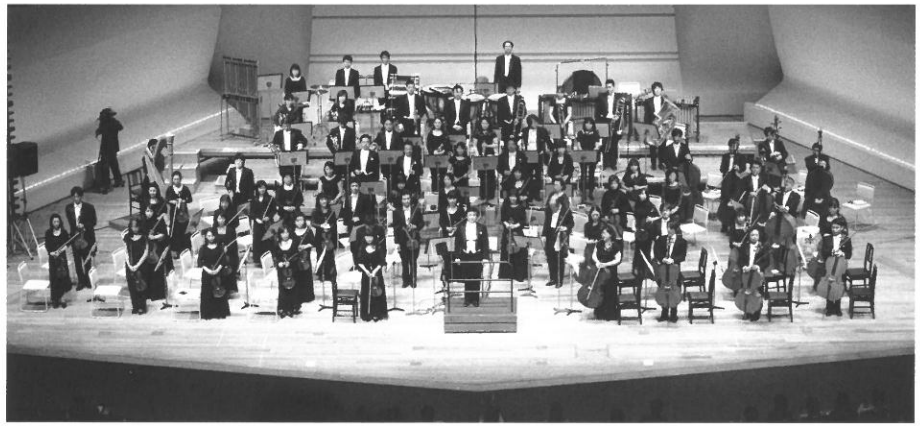
東京ニューシティ管弦楽団は、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し1990年に設立。定期演奏会、名曲コンサート、オペラ、バレエ、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍している。なかでも定期演奏会では「いつも なにかが あたらしい」をキャッチフレーズに、最新の音楽的な研究成果をいち早く取り入れたプログラミングに定評があり、作曲家が生きていた時代の奏法なども積極的に取り入れるなど、その斬新かつ意欲的な内容は常に大きな話題をよんでいる。

オペラの分野では、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演のほか、レナータ・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・プライ、ルチアーノ・パヴァロッティ、カルロ・ベルゴンツィ、アグネス・バルツァ、アンドレア・ボチェッリほか世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、共演者からも絶賛の言葉を贈られている。バレエの分野でも、国内の主要バレエ団の他、英国バーミンガム・ロイヤルバレエ団、ボリショイ・バレエ、マリインスキー・バレエ、アメリカン・バレエ・シアター（ABT）等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポートする誠実で質の高い演奏が毎回高い信頼と評価を得ている。

また、クラシックのみならず、バート・バカラックをはじめとして、さだまさし、ASKA、平原綾香、水樹奈々など、ポピュラー分野でも幅広い活動をしそれぞれに評判がよく、多くの皆様に親しまれている。最近では、ロック歌手スティングのジャパンツアーに参加し、数多くの観衆を魅了した。

2006年には（社）日本オーケストラ連盟に加盟、2011年正会員に昇格。2007年に初の中国上海公演、2009年にはベトナム公演を行い、大成功を収める。

2010年4月に創立20周年を迎え、さらなる発展が期待されている。 http://tnco.or.jp



Tokyo New City Orchestra

石田 一志（音楽評論家）Kazushi Ishida

山田 一雄／《おほむたから》

山田一雄（本名、和夫1912～1991）は、1931年に東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）のピアノ専攻を卒業後研究課程に進み、卒業後は同校で後進の指導に当たったが、在学中からマーラーの直弟子で作曲科教授兼指揮者として来日していたクラウス・プリングスハイム（1883～1972）に師事していた。プリングスハイムは、ベルリンでマーラー交響曲全曲演奏の体験をもち、日本でも新響（現N響）で第1番と第4番、東音では学生・教員・海軍軍楽隊からなるオーケストラを使って第5番、第2番、第6番、第3番、第7番の日本初演を行うなど、マーラーの使徒の役割を果たした。

山田は当初、歌曲とピアノ曲から作曲活動に入ったが、《日本の俗謡による前奏曲》（1936）で日本放送協会コンクールに第一位入選すると、小交響曲《若者のうたへる歌》（1937、新響第2回邦人作品コンクール入選）、国民詩曲《交響的木曽》（1939、日本放送協会委嘱）と、オーケストラ曲に果敢に挑戦していった。《俗謡》や《木曽》などはタイトルのように日本的な題材への関心を鮮明にしているが、一方、師の演奏したマーラーから受けた影響もマーラーの《巨人》を思わせる《若者のうたへる歌》に顕著である。

朝日新聞社の委嘱で作曲されたこの《おほむたから》作品20（1944）には、この二つの特徴が並存している。雅楽風の打楽器を伴う声明風のファンファーレで始まるが、全体としてみれば、マーラーの交響曲第5番の第1楽章と第2楽章の楽想と、天台宗の声明の曲想が合わされている。

なお、「おほむたから」という題名は、「天皇のおおきな御宝」、すなわち天皇の臣民を意味する。作曲者は「古事記に出てくる言葉で、わたしはこの曲の中に、古き時代から続いてきた日本の壮大な歴史と伝説、そして美しい国土を愛する気持ちを注ぎ込んだ。戦争の軍歌調に見られるように、香気なく、いたずらに勇ましいばかりの怒号に終止しがちな音楽の現状。音楽を戦意高揚に結び付けがちな人々の多いことへの恐怖―。なおざりにされ、忘れ去られているような、素朴で尊い、大きな人間愛のすばらしさを、わたしはオーケストラ空間に表現していった」とこの作品について述べている。

マーラー／交響曲第5番 嬰ハ短調（新校訂版）

グスタフ・マーラー（1860～1911）は、1901年から1905年にかけて、ほぼ一気に交響曲第5番、第6番、第7番を作曲している。この時期は、彼の生涯で、もっとも幸福な時代であった。とくに40歳を迎えた1901年は、この時代の幕開けといえる特別に意義深い年であった。2月にはウィーンで《嘆きの歌》の初演があり、11月にはミュンヘンで《交響曲第4番》の初演があり、創作に関してはリュッケルトの詩による数曲の歌曲の完成があり、そしてこの《交響曲第5番》のスケッチが始まった。さらに私的環境では11月に宮廷画家ヤーコブ・エミール・シントラーの娘アルマと初めての出会いがあり、彼女の関係からウィーン分離派の画家や建築家の面々との交際が深まっていった。

アルマとは翌1902年3月に電撃的に結ばれる。新夫妻は、その6月にケルン北方に位置するクレーフェルトでの《交響曲第3番》の初演のあと、直接、オーストリア南部ヴェルター湖畔のマニエルニヒの作曲小屋を訪れた。そしてマーラーは、前年着手した《交響曲第5番》の作曲をこの夏季休暇中にほぼ完成させたのである。さらに、新婦アルマも手伝って1903年のはじめの数ヶ月のうちに総譜の清書まで完了した。初演は1904年10月18日、マーラー自身の指揮でケルンにおいて行われている。

この第5番は、その構築性、力強い響き、大胆な和声語法とダイナミズム、ポリフォニックな手法において傑出した作品であるが、しかし、初演後もマーラーはオーケストレーションに関する補筆修正を続けた。指揮者として、自分の求める響きの明晰さを探求し続けたのである。自分の音楽のよき理解者であったオランダの指揮者ウィレム・メンゲルベルクにあてた書簡がそれを伝えている。まず初演数ヵ月後には「広範囲に及ぶ重要な修正をおこなった」ことが、また1906年にも「無数の修正。しかも極めて重要な」改稿を行ったことが、やっと1911年2月8日、死の数ヶ月前にはニューヨークから、「まったく全面的にオーケストレーションをしなおし」、やっと「完成」に至ったことが伝えられるのである。

初版は、ライプツィヒのペータース社から1904年に刊行された。全集は第V巻、1964年の刊行。1989年に改訂版が出たが、今回は、さらに新しい研究成果を盛り込んだ2002年の新校訂版（ペータース社）を用いた演奏である。

全体は、5楽章からなるが、3部に分けられており、第I部（第1，2楽章）、第II部（第3楽章）、第III部（第4，5楽章）とされている。第1楽章と第4楽章は、それぞれ次の楽章への序奏部的性格をもっている。